

海外生活 エッセー

北京事務所

中国といたらお茶？

(一財)自治体国際化協会北京事務所 所長補佐 吉岡 正博 (京都府派遣)

→ 中国の飲料文化

北京の暮らしではやはりお茶をよく飲むのですか、と日本の方から聞かれることがありますが、北京では意識をしないとお茶を飲む機会は多くありません。日本料理店以外のレストランでお茶の無料提供は少なく、よくて白湯が出るだけというのが一般的です。中国茶は、湯飲みや茶壺の湯の中に直接茶葉を浸し、じっくり茶を出すため、一人の時や簡単に済ませたい時の食事には不向きで、物によっては清涼飲料水より高く、日常気軽に飲めるものではないと感じます。国民1人当たりの茶葉消費量は、意外にも中国は日本より少なく、世界的に見ても特別多い地域とはいえないというのが実状です。

また、北京の街中では、若い人を中心にコーヒーの容器を持って歩く姿をよく見かけます。赴任前は、中国の方はコーヒーや冷たい飲み物を飲まないと聞いていましたが、中国の飲料文化は年々変化しているようです。考えてみると自然なことで、過去の日本同様、経済が発展するにつれて、街中の商品やレストランが多国籍化しているため、飲料の選択肢もお茶に限りません。

→ 中国茶の生産は↑↑

では、中国では中国茶は下火だと言いたいのかというと、そのようなことはありません。

中国の茶葉生産量は長年世界第1位で、さらに年7%以上の伸び率で増え続けています。中国政府が茶を国内重要産業と捉え、生産や輸出を奨励していることが要因の1つと考えられます。茶の種類も緑茶、紅茶、白茶、黄茶、青茶、黒茶という基本分類の下、数え切れないほどあり、質・量ともに茶の発祥地としての中国の存在感は健在です。私たちが中国と聞いてお茶をイメージするのは、このような「生産地」としての印象が強いからかもしれません。

→ 中国茶も多様化の時代

実際は、中国の茶葉消費量も生産量とほぼ同じ勢いで伸び続けています。中国の人々の健康意識の高まりや商品開発による多様な茶飲料の登場などにより新たな需要が生まれていることが背景に挙げられます。中国茶は、日常当然に飲まれる存在ではなくなった代わりに、選ばれる存在に変わりつつあるようです。

北京の街中では、昔ながらの茶館が少なくなった代わりに、若い人でも行きたいと思えるようなおしゃれな中国茶専門のカフェやスタンドが登場しています。そのような店では、果物や花実を複数組み合わせたジュース感覚で飲める中国茶が提供されて人気を得ており、新たな中国茶の楽しみ方を知ることができます。現地の方々の話では、中国茶をそのまま飲む機会は減っているものの、これらのカフェなどはよく利用するという事です。コンビニでも、無糖のものから甘いものまで、さまざまな需要に合わせた商品が並ぶようになっています。

中国は国土が広く、各地域で飲まれる茶葉の種類や人々の嗜好、飲食の組み合わせも異なります。中国の経済発展を受け、人々の生活の変化に伴ってそれらはまだまだ変わっていくものと思います。



街中の人気スポットに続々とオープンしている中国茶専門カフェ